

フランス元首相, ドミニク・ド・ヴィルパン氏

— “眠れぬ館”での「平和への思い」 —

杉山 朱実

はじめに

フランスの元首相, ドミニク・ド・ヴィルパン氏と私との出会いは, 2004年3月1日に遡る。当時, 外務大臣として活躍していた氏は, フランス本国では, 旧フランス統治国であったハイチの内戦, モロッコでの地震処理と多忙を極め, また, あの, アメリカ単独主義のイラク戦争が始まる前には, 戦争を回避しようとした力説の国連演説で, 各国代表から拍手喝采を受けた時期であった。多忙を極める氏にも関わらず, この時期に来日できたのは, 日本を尊敬するシラク大統領の後押しがあつてのことであった。

「フランスと日本, 一新しい国際的脅威に面して」と題された講演会が, この日, 九州大学医学部の百年講堂で開かれた。警備の都合上, 限られた招待者であったが, グローバル化が叫ばれる中での差し迫った問題点に関して, 世界平和への道筋を示す, とても有意義な講演会であった。

その後, 質疑応答に入ったが, 通訳を介しての質問が多い中, 私は, フランス語で直接質問してみた。「アメリカによって, 世界で初めて原爆を受けた日本が今, 国際平和のために何をすべきか。また, そのために何をすべきか。」と。ド・ヴィルパン氏は, 当時, 外務大臣という要職にありながら, 誠実に丁寧に次のように答えてくださった。「ここ九州にあつては, 長崎での被爆があり, 日本国民は大変悲惨な目に遭ってきた。しかし, 軍備ではなく, 経済で発展の努力をしてきた。戦争放棄という対話の努力の中で, 戦後50年間目覚ましい発展を遂げてきた。日本は変らずに, この国際社会の中で対話の姿勢を大切に, 東洋の中心的思想である“協調の心”をもって, 国連の中でも, 国際社会でも, 国際平和への協調を対話で続けるべきである。」と語った。

あの, アメリカ単独主義のイラク戦争が始まる前, 戦争を回避しようとして力説した国連会議での演説で, 珍しく各国の代表団から拍手喝采を受けたが, この日の講演でも, 戦争後の国の再建へ向けた国際協力の必要性を力説していた。すでに当時フランスからは, 民間の「国境

キーワード: ド・ヴィルパン首相, 国際平和, 国際的脅威, イラク問題, テロへの見解

なき医師団」のグループが医療活動に入っており、他にも民間のNGOグループが給水活動を展開していた。本来であれば、国連という大きな枠組みの中で、軍隊ではなくNGOを中心とした多国籍の人道援助があるべきだが、それには石油への利権がからみ、国連からの人道援助という形を取れないでいる現状である。しかし、ド・ヴィルパン氏は、すべてのパートナーとの協議を再開し、全ての国が貢献できるよう、諦めずに努力を続けていきたい、という強い決意を述べていた。この強い決意は、氏のどこから湧き出てくるのであろうか。

さらに、当時、ヨーロッパは、更なるEU統合の中で、司法、移民、安全に関して、有効な協力の手段を得たいと願っていた。現に、第一次世界大戦、第二次世界大戦ともに敵国であったドイツと共に、EUでの「新しいヨーロッパ」へ向けての中で、中心的役割を担い、より民主的で、より透明性のある、より効率的なEUの設立のために、この目標を達成できる憲法を必要とし、歴史的要請がそれを義務と課し、それに答える決意をしているとの述べ、世界中に広がる国際的脅威の中で、諦めずに国連という大きな枠組みの中で、すべてのパートナーとの対話から交際貢献、国際平和へのあり方を導きだすべきだと力説していた。

2004年5月1日、EUは25カ国に拡大し、「新たなヨーロッパ」を発足させていた。ド・ヴィルパン氏は、外務大臣から内務大臣となり、変らずに、対話による外交を通しての国際協力、国際平和への道を、シラク大統領の片腕として、歩み続けていくはずだった。

このような、わずかな出会いにも関わらず、氏からは、外務大臣、内務大臣、首相として毎年フランスからカードが届くほど、誠実で丁寧で心優しい、氏の姿があった。

1. 国際社会の危惧への断固とした思い

ド・ヴィルパン氏との出会いから20日後の、2004年3月22日、ヨーロッパへ戻った氏は、EU本部のおかれたブリュッセルで、EU外務大臣理事会で、記者からの「イラク問題にたいする見解」を以下のように述べている。

《……期日は迫っている。国際社会が国連と連携して、さまざまな可能性をすべて活用することが求められている。しかし、イラクに正当性のある政府、主権を有する政府がある限りは、また、イラクが自国の運命を制御する力を全面的に取り戻さない限りは、われわれに、この国の情勢を実際に立て直すために必要な切り札はない。我々は、イラク主権政府とともに作業を進める必要がある。権限の委譲が良好な状態で進められるようにしようではないか。これは6月30日の夜に布告されるべきものではない。私は、物事が慌ただしさと最大の混乱の中で起こるのではないかと危惧している。国際社会は今すぐ立ち上がるべきであり、私が国際社会に、今日よりも、はるかに強力で結集するよう訴えた理由もそこにある。……それは、国家、地域、国際の3つの面を含んだ国際会議を期日前に開催

することを通して可能かもしれない。準備が充分になされていないことは事実である。失った時間を取り戻す必要がある。》

(公式声明抜粋、公式文書はフランス語原文、駐日フランス大使館提示)

しかし、次の外相会議が開かれ前に、「ド・ヴィルパン氏の危惧」は的中してしまった。アメリカのブッシュ（息子）大統領のもと、イラクへの単独先制攻撃が開始されたのであった。この時以降、世界秩序は「崩壊へのパンドラの蓋」を開けてしまったようだ。

これ以前にも、ド・ヴィルパン氏は、2003年8月28日、パリでの「第11回大使会議における基調演説」で、「テロへの見解」をこう述べていた。

《……テロへの挑戦は国家やその他の挑戦ではなく、国家社会全体への挑戦である。世界は不条理と憎悪の最後通達を受け取るわけにはいかない。大量破壊兵器の拡散と地域崩壊組織に付け入る隙を与える可能性があるだけに、テロ根絶の取り組みがいっそう必要である。……今では、秩序の確立や平和維持や同盟の枠組みでは、手に余ることは周知の事実である。ブロック間の対立が終わった今、戦略的空白を埋められるのは、集団的行動を置いてほかにない。……テロの脅威は、ここ数年の間に戦略的側面を備えたので、包括的な対策が必要であり、警察をはじめ、司法、財政、情報など、各方面で行使可能なすべての手段を通じてから立ち向かわなければならない。さらに、地域危機から深刻な貧困に至るまで、テロの温床となる諸問題への対策がある。テロは、不公平や屈辱、無理解といった感情につけこむ。それゆえに、危機の温床にたいする断固とした行動と、関係当事者の間で精力的かつ厳しい姿勢をもって進める努力がなされなければ、持続的な解決はありえない。長期的に見れば、テロという狂信的行為に対して最も固い防護壁となるのは、民族や宗教を超えた真の共有にほかならないのである。……新しい世界の鍵は、国際社会のまとまりにある。新しい時代の始まりを告げている。今では世界は、全体的な一つのまとまりを形成する。世界は強大国の難題な計算によって、分断されることはない。今日、我々は、道すじある思想、価値にもとづいた秩序を築き上げることができるのだ。……》

(公式声明抜粋、公式文書はフランス語原文、駐日フランス大使館提示)

ヨーロッパでは、東ドイツの壁が壊れ、長年の念願であった「東西ドイツ統一」がなされた。イスラエル、ラビン首相とパレスチナのアラファト議長との「握手」がアメリカでなされ、平和への道が開かれるかのように思われていた。ゴルバチョフ書記長のもと、旧ソビエト連邦は解体したが、流血はなく、バルト三国から始まる「ロシア共和国」復活までは、無血の平和への道を世界中が歓喜し、世界平和への扉が開かれていたように思われていた時期であった。

2. “TANDEM”の悲劇

“TANDEM”とは、本来のフランス語の意味では、「二人乗りでこぐ、一台の自転車」のことである。しかし、フランスでは、新語をつくるのではなく、“新たな意味”を既存の単語へ投影させていき、その時代をかたり、解説していく。

そうしたラジオ番組が「France Inter」（フランス・アンテル）の朝の番組、“日々の言葉”の中で、アラン・レイが解説している。2005年6月1日放送の中で、この“TANDEM”が紹介された。「ジャック・シラクのもとで、ドミニック・ド・ヴィルパンとニコラ・サルコジが乗り合いとなる」と。この時まで、シラク大統領の片腕となり、外務大臣としての外交問題、内務大臣としての「移民学生との対話集会」や「シャルル・ドゴール空港問題」など、フランス国民の内政不安問題にも対処し、ド・ヴィルパン氏は当時、フランス首相となっていた。「二人乗りでこぐ、一台の自転車」“TANDEM”に、ド・ヴィルパン首相とシラク大統領が“相乗り”し続けていたら、世界秩序、世界平和への道筋も、きっと違ったものとなっていただろう。シラク大統領が乗せたのは、フランスとしては珍しく、エナ（フランス政治学院：日本からも明治以降、当時の通産省と外務省から各一名ずつ派遣され、外国人枠での政策・政治を学び続けている。）で学ぶことができなかった、ルーマニア移民一世のニコラ・サルコジ氏を外交経験等がないまま、内務大臣に起用したのである。

そうした心労からか、2005年9月5日、「シラク大統領が2日、緊急入院でド・ヴィルパン首相の役割拡大か」と報道される。事実、シラク大統領は、その後、血管障害の病気療養のため三ヶ月後の12月過ぎまで病院に入院し、その間エリゼ宮での公務を側近といわれたド・ヴィルパン首相が、こなしていくこととなる。2005年には、「新たな家族政策」と題し、「女性の雇用への復帰と促進」、「子供が、重い病気にかかったり、障害を負ったり、事故にあった場合、付添親休暇及び付添親手当の支給」といった、「新たな家族政策」を発表した。翌年1月8日のフランスのテレビ番組、「カナル・プリュス」で、「フランスの問題にフランス人と共に解決していく準備がある。」と語り、2007年の大統領選挙の第一候補であった。

薄れゆくシラク大統領の影

だが、シラク大統領が公務復帰後、はっきりと後継者指名をしない中、サルコジ氏が大統領選挙の出馬表明を行う。そして、フランスの威信は内部崩壊の始まりとなった。政論を戦わせての出馬表明ではなく、サルコジ氏が行ったのは、シラク大統領とド・ヴィルパン首相にたいする「犯人よばわり」の告訴であった。結局、保守連合の代表としてサルコジ氏だけが出馬することに、シラク大統領、ド・ヴィルパン首相も同意した。その影響か、2007年の大統領選挙の投票日、私は偶然フランス、アルルでのCTHSでの学会発表にのぞんでいたが、学会終了後、

パリまでの帰還道で一緒にもどる学会参加のフランス人学者達は、その日の午後8時までの投票に、誰に投票するかを決めかねていた。

すでに報道で知っていたとおり、サルコジ氏は大統領就任後、半年たって大統領権限が切れた高齢で病後の前シラク大統領へ対して、「パリ市長時代に遡る政党資金不正流用疑惑」で告訴を行った。ちょうど、2007年10月から特別研究員としてフランスに一年間滞在していた私には、テレビでみる裁判所へ向かうシラク前大統領の姿が、とても痛々しく映った。その後、何度かの裁判へは、病弱な体のまま痛々しいまですでに出廷を重ねていたが、ついには認知症となり、出廷が困難となってしまった。裁判結果はシラク前大統領不在のまま、有罪判決となって終了した。EU統一後のフランスとドイツの架け橋として、活躍されていた、そして、何よりも、篤く深い知識で日本を尊敬していた前大統領の、思いもかけぬ形での政界引退の幕引きとなった。

もう一方、ド・ヴィルパン前首相へ対しては、「サルコジ氏を陥れようとしたとする謀略疑惑」で告訴され、前首相宅が家宅捜査をうけた。しかし、ド・ヴィルパン氏自身が弁護士の頭脳をもち、何度も繰り返される裁判所への出頭もすべて丁寧に答え、ついには2011年9月14日無実を勝ち取った。

2012年に二期目を目指したサルコジ氏であったが、落選後、「巨額献金疑惑等」で、サルコジ氏自身が告訴をうけている。

実は、2008年は、日本とフランスにとっての「日仏友好修好条約150周年」の年であった。しかし、フランス国内での滞在中、目にしたのは、サルコジ政権となり、動乱のフランスであった。大学構内では、学生の年金支払い寮費値上げなどで、高校生まで広がりを見せたデモや学内封鎖がクリスマス休み近くまで続いた。法曹をきた弁護士たちも、法律書を燃やし、デモに参加した。もちろん、地下鉄、バス等の労働者たちもストライキを決行し、駅へ行っても交通機関が動かない日々が続いていた。さらには、サルコジ氏自身と同じ、フランスでの滞在許可書をもつルーマニア移民のロマの人たちに、フランス人の雇用のなさを理由に強制退去命令を出し、デモの一因となっていた。

もし、“TANDEM”にシラク前大統領が、サルコジ氏を乗せなければ、シラク前大統領自身とド・ヴィルパン前首相の二人で、“TANDEM”に乗りつづけていれば、「日仏友好150周年の年」が、フランスで平穏の中で時が刻まれていたことと思う。

日本を出発する前、私は駐日フランス大使館でド・ヴィルパン氏の連絡先を尋ねてみたが、「ショックを受けた氏が、連絡先を誰にも知らせていない」とのことだった。フランスでは、外務大臣、内務大臣、首相と変るたびに、親切にも日本からの連絡に答えてくれていた秘書官たちであったが、フランスのエリゼ宮でも、彼の連絡先はわからないとのことであった。

日本への帰国前に、2008年、「日仏友好修好条約150周年」のこの年に、私は、どうしても、

もう一度、ド・ヴィルパン氏にお会いし、氏の思う「平和への意思」が、これほどまでになぜ強いのかを尋ねてみたいと思っていた。そして、奇跡が起こったのである。

3. 再開 “眠れぬ館” での思い

奇跡は、帰国間近の2008年6月に起こった。

2008年6月17日(火曜日)の“LE FIGARO”(フィガロ：フランスの二大新聞のひとつ)の一面に、モンペリエ(南フランス)で一般聴衆の前で語るド・ヴィルパン氏の写真と記事が載ったのである。記事の見出しは、“L'ancien premier minister n'a pas encore Choisi entre un retour à la politique et sa nouvelle existence d'avocat, conférencier et écrivain.”(前首相は、政界への復活と弁護士、講演者、作家との選択を、まだ選んではいなかった。)

この記事の中で、弁護士でもあり、作家でもあるド・ヴィルパン氏が、沈黙を破って初めて、モンペリエで聴衆の前に、講演した様子が書かれていた。エリゼ宮を去り、秘書はNadine(ナディヌ)一人となり、小さな事務所に引っ越したことも書かれていた。そしてモンペリエで一般聴衆に語っていたのが、彼が2008年に出版したばかりの“HOTEL DE L'INSOMNIE”(眠れぬ館)での想いだった。すぐさま、私は滞在先のトゥルーズからパリへと手紙をだした。6月25日消印のド・ヴィルパン氏自身のサインで書かれた返信を6月26日、トゥルーズで受け取った。さらに、私のトゥルーズの滞在先ホテルにナデーヌから伝言電話が、かかっていた。「帰国前に、ド・ヴィルパン氏自身から、“眠れぬ館”での想いを是非、聞くために、直接お会いしお話を聞きたい。」といった、つたない手紙の私の思いを実現してくれたのである。折り返しの電話をすると、「いつ、パリに来れるか」を確かめ、2008年7月10日、パリで、ド・ヴィルパン氏と再会することができたのである。

“眠れぬ館”は、その後、2008年度、(南フランス)エクサン・プロヴァンス賞を受賞した散文詩集となる。ド・ヴィルパン氏が首相時代、公務を終わってのエリゼ宮で、明け方まで執筆をしながら、世界平和への願いを託していたのが胸を打つ散文詩集である。

まず、“前書き”には、次のように書かれている。

(訳：杉山朱実)

《ここ、ヴァレンヌ通り(エリゼ宮のあるフランス大統領府)では、時間給の労働者達が通り過ぎていく。しかし、彼らが、ほとんど感情をあらわにすることはない。なぜなら、ここが長時間労働から解放され、日付のない登録簿から僅かな一部一時金支払いを受け取る場所であるからである。

ミノタウロス(ギリシャ神話の牛頭人身の怪物)と向き合って、インクと紙で紡ぎだす、

この一筋の糸のような繋がりが、岬を越えるように困難な限界を超える私の助けとなってくれた。紙の一枚一枚に、私は肩の荷が軽くなり、解き放たれるのを望んだ。：苦難が自由へのチャンスと成りうるべき時、人の心に良心への変化が起こるまで、前へと進む強さを見出すために自分自身を掘り下げたく思う。

何かを論じようとするのだけれども、常にその道程には、強硬派やキリストの十字架がある。しかし、おそらく、我々の最良の味方は、時折、貧しい境遇の天命なのである。

真夜中に、孤独が碎かれるのは、我々自身の戦いのために武器と同様の言葉を我々に与えてくれる、生きる指標を定めてくる、軍隊の前線で生活を切り開いて初めて手を染める、世間から隠れた人目を避けた仲間たち、志願した仲間達の恩恵のおかげである。彼らに続いて、すべての沿岸住民が新たな地平線の領域への襲撃に、そそり立つ。そして朝には、奇跡が繰り返される。人は目覚め、あらゆる束縛から自由となるのである。》

このように、詩の中には、既に見られたように、ギリシャ神話からの比喩や、ボードレール、リルケ、カフカ、パレスチナの詩人ダルウッチ等、数限りないたくさんの詩人たちからの一説を比喩として使い、多忙な首相公務の中、膨大な知的作業をこの詩集にたくしていたのがわかる。一人称を多く使い、自身の幼い頃のことも語っている。

そうした詩篇のいくつかを紹介してみたい。

(訳：杉山朱実)

《進もう！ じっとせず出発しよう！ しかし、歴史の同じ繰り返しを知らずに、いることができようか？ もし（世間の常識、道徳などを軽蔑する態度の）キニク主義に、取り付かれていたら、もし娯楽趣味が強かったら、もし欲望の連鎖が権力をふるうのなら、それらが、我々の人生そのものの方向を時には変えてしまう。

出発間際の人間にとって、一步一步が、ほこりを搔きたて、そして、足跡を残す。

（神が人間の肉体を作った）土に、積み重なった疲労、苦勞、辛い仕事で、しわが刻まれた。闇が、もはや、いかなる痕跡も残すことがない様に思われる、かくも、脆く崩れやすい、かくも軽くなった巡礼者の心を捉えている。地平線の未来のこの瞬間を、私は待ちわびる。月食が月の恐れを、最初の新興に結びつけた頃の、地の果てに住む暮らしが、私は好きである。そこにいる時には、いにしえからの魂の良心の呵責が聞こえる。》

さらに、1953年11月に旧フランス領、モロッコのラビトで、生まれた彼は、それを隠すことなく、幼少時代の戦争の悲惨さを詩集の中で、語っている。

(訳：杉山朱実)

《心には、それぞれの大地への思い出があり、その大地にも、また、それぞれの歴史がある。私の少年時代の村々のことが、私の胸を打つ。サン・ジュニアン、シュウー、オラドウル・シュル・グラン、そこが、私の祖母、母、看護婦達が、すざましい殺戮の後、赴いた場所である。

穴のあいた家々や黒こげになった壁の惨状を目にしたのは、私が7歳の時であった。

学校から離れて、ごったがえした場所を、私は集団児童としての旅をし、旅から旅への繰り返しであった。女性達と一緒に、集団児童達は、教会の中に集められたが、やがて、そこも焼け野原と化した。今でも、まだ鳴り響く、「でこぼこ道を打ち鳴らす、(農民たちの履く)小さな木靴の耳障りなざわめきの音」

オラドウルの子供達、ゲルニカ (スペインの内戦の象徴)、リデイス (リビア)、あるいはヴァルソビ (サラエボの内線地) の同じ苦痛にあう子供達、そしてイラクやパレスチナの子供達！》

4. “眠れぬ館” での「平和への思い」

ド・ヴィルパン氏の国連での「戦争回避の強い思い」は、彼の実体験からきていたのであり、それ故に、あれほど世界中の人々の心に深く、彼の強い思いの言葉が浸透したのであろう。あの時、国連で背にしていたのが、ピカソが描いた「ゲルニカ」の絵 (レプリカ) である。「ゲルニカの悲劇」は、『ゲルニカーピカソ、故国への愛』(富山房インターナショナル、2012年) の中でも、次のように書かれている：

(文監修：アラン・セール、訳：松島京子)

《1937年4月26日、16時30分、スペイン北部の小さな町ゲルニカの空が暗くなり、飛行機が広場、道路、建物に爆弾を落とす。月曜日のこの日は、ゲルニカで市場が開かれる日で、近隣の村からの人々が集まっていた。飛行機は、ドイツのコンドル軍とイタリアの爆撃機からであった。ヒトラーのドイツ・ナチとムッソリーニのイタリアがスペイン・フランコ将軍に軍事援助を行い、市民戦争は40万人の犠牲者をだしたといわれる。そして、まもなく、第二次世界大戦が告げられるが、小さな町の大きな議事堂の中には、バスクのシンボルである一本の樅の木、ゲルニカの木がたっていたのだ。ゲルニカの悲劇をフランスで知ったピカソは、その衝撃をキャンパスに描く。ギリシャ神話のミノタウロスをデッサンし、スペインがフランコ将軍から解放されるまで、決して足を踏み入れることはないと終生、その意思を貫いた。》

それとは、対象的なのがリビアである。旧フランス領でもあるリビアは、カダフィ大佐のもと、数年前から、良質の石油が発掘可能であることがわかり、民主化へと舵を切り始めていた。サルコジ政権下、エリゼ宮へ招待されたカダフィ大佐であったが、エリゼ宮の中にテントを張ってすごすなど、一般的には、大佐らしい行いであった。だが、サルコジ大統領（当時）には、無礼行為に映ったらしく、あのアメリカのブッシュ（息子）大統領と同じように、今度は、サルコジ氏指示のもと、フランスでの単独攻撃を行い、今の無法地帯のアフリカの源を作り出してしまったのである。

90年代のサラエボの悲劇も、まだ記憶に新しい。フランスに住んでいた時、いつも行くお菓子屋さんがあった。いつもどおり、大学でのことなど日常話をしていた時に、迷彩服の若者が一人、リュックを担いでウインドウを見ながら申しわけなさそうにお店に入ってきた。聞けば、今日の夜の列車でサラエボへ戻るが、この街（トゥルーズ）の思い出に彼女に何かお土産をあげたいとのことだった。とても若く20前後の若者のように思えた。お菓子屋さんのおばさんは、「長持ちするから」とドラジェ（アーモンドに砂糖でコーティングしたお菓子でフランスでは結婚式に配られることが慣習）を選び、2さじほど、おまけをしていた。そして、バイオレットのボンボン（トゥルーズの名産で、幸福をもたらすというお菓子）を、「これは、あなたへのプレゼント！」とあって、そっと渡した。料金を払おうとした、その迷彩服の若者に、お菓子屋さんのおばさんは、「今度の休みに戻って来た時にね！ BON RETOUR !」とあって、外まで見送り、お金は受け取らなかった。私たちが、何気ない日常会話をしている間も、ド・ヴィルパン氏が書いたように、どこかで戦いが続いている。そして、私たちが守られているのかもしれない。

しかし、このような悲劇を終わりにしなくてはいけないと、強く願っている。歴史は繰り返される悲劇にある。この思いが託された詩がある。

（訳：杉山朱実）

《私は、長年にわたり、危惧していた。20世紀の破滅の前兆のサインについて、おそらく、我々は、鉄器時代から抜け出していない。しかし、詩篇は予兆し、恐怖を遠ざけてくれるのに役に立ち、尽くしてくれる。この課せられた務めには、今日（こんにち）、かつてないほどの意義をもつ。

私は、絶えず思い出す。詩人ランボーの一節の決まり文句を：「恐怖政治はフランスのみにあらず」と。扇動者は、フランスの歴史を、1793年、ないがしろにする。そして、朽ち果てていく先頭者達よ、三色旗の叫びに、フランス大革命の徐々に拡大化していく「うねり」という木々の実りを崩壊させるために、別の風をもたらすこともなく。

「愛国的な狂気・偽り」が、その収穫物を束にして捕らえた。もし、まるまる全部を我が物とすることができぬのなら、才能ある詩人が、先見者の自身の体験の穴（活動の停

滞期)に、恐れを認めている。なぜなら、恐怖政治は、現実の中で行使されているゆえに、このような激しい恐怖は、言葉によって表現されるからである。》

そして、時がたっても、今もイスラエルとパレスチナの問題は変わらずに、さらに重大化している。先見の目をもったド・ヴイルパン氏の危惧が、氏の「平和への願い」となって次の詩篇へ綴られている。

(訳：杉山朱実)

《イスラエル人とパレスチナ人の間の紛争の中心へと陥った、ベイルートの所在地の証人ダルウイチ (Darwich: パレスチナの詩人) は、何度も牢獄を知ることとなった。今日 (こんにち)、まだ、彼は、ヨルダンのアンマンとパレスチナのラマールのどこかしらを尋ね歩いている。

彼は、光を待っている、暴力の行為を暴こうと、他の事を無視して、多数の人命を奪う破壊に憎しみをぶつけている。不意に、彼は、墓の穴ではなく、希望の穴を掘りたいと思う。イスラエル人とパレスチナ人とが、いつの日にか、一緒に、宣言することができるであろうに違いない、この言葉から、平和が湧き出であろう。しかし、国境が、まだ、案山子の怪物のように、立ちはだかっている。

地理と政治の強制力を、ものともしない、このような新しい「通用 (できる) 壁」に栄光あれ! 脅威と崩壊にみちた我々の世界で、詩は、力を持つ。たとえ、一つの言語に根付くものであっても、希望のメッセージをもたらす為に、国境から地上へと言葉は飛んでいく。しかし、急がないと、なぜなら、希望は、もろく壊れやすいから。時には、重たい飛翔で、壊れてしまったり、死んでしまったりする、マハムッド・ダルウイチ (Mahmoud Darwich) が、「ガリラヤの鳥 (パレスチナ地方の): Cf. ガリラヤのスペルはキリストと同じ」の死をみたように。》

おわりに

ド・ヴイルパン氏の「平和への危惧から平和への願い」は、今回、ほんの一部しか紹介できなかったが、自身の幼児体験もあからさまにしながら、たくさんの詩人の言葉を駆使して、平和へのメッセージを、あの「眠れぬ館” エリゼ宮にいた首相時代から持ち続けていた。決しておごらず、対話の中で解決していこうとする姿勢は、まったく感服する。

彼が発信した言葉から、「真の平和への扉」が開いていくことを切に願っている。